

# 都市空間の90年代をめぐる考察

——原宿を事例として——

石井 和也

1980年代における消費社会論的枠組みに依拠した都市空間の分析視座（本稿においては、上演論的アプローチ）が、ことさら1990年代の都市空間を否定的なものとして描き出す現状を受け、本稿は、1990年代の都市空間についての社会学的考察は、何を機軸としてなされるべきかを明らかにする。具体的には、原宿に照準を合わせ、原宿への来街者と原宿住民が描くメンタル・マップと、原宿で発行されていたミニコミ誌の記事を手がかりに、90年代の都市空間においては、「擬似居住者意識」が大きな意味を持つことを明らかにする。その上で、〈家郷〉概念に注目し、90年代の都市空間が〈ささやかな家郷〉として展開していることを示し、80年代と90年代の都市空間の連続と断絶を明らかにする。

## 1 問題の所在——90年代の都市を論じるために

1970年代以降、ロラン・バルトら記号論者の主張（Barthes 1971=1975）に依拠するかたちで、日本の都市空間は記号論的解釈の対象とされてきた<sup>1</sup>。そこでは、都市空間をテキストとして「読む」作業が繰り返され、現在にまで続く都市論の主要な潮流となっている。その一方で、このような記号論的な都市論においては、都市空間における人びとの実践が見落とされているとし、都市空間を生きる人びと自身の都市空間に対する「読み」——そして、その「読み」を踏まえた「演じること」——へと重心を移すことを標榜した、上演論的アプローチが生まれ出されていった<sup>2</sup>。

特に、1980年代以降は、吉見俊哉の上演論的アプローチ（吉見 1987）を代表として、80年代的な盛り場や消費空間としての渋谷への注目が強調されるようになった。そこでは、ジャ

ン・ボードリヤール流の消費社会論的語り口<sup>3</sup>と符合する空間演出が拡がりを見せ、回遊的な消費のスペクタクルの展開とそこを遊歩する身体との結合は、上述したような方法論を持つ都市論にとって、恰好の対象となっていたのである。

ところで、以上のような分析視座を動員しその機制が明らかにされた消費空間としての渋谷は、北田暁大が的確に指摘したように、90年代以降、〈演じる〉という契機とともに、それを下支えしてきた舞台性を解体させる方向へと突き進んだ<sup>4</sup>。このことは、当然のことながら、上演論的アプローチの限界を意識させるものである。しかし、この「限界」は、単純にそれが80年代的な消費空間においてのみ限定的に有効性を持つものであり、90年代以降においてはその有効性が失われてしまったことを露呈するものであると判断することが妥当であるかどうかは、結論を待たなければならない。というのも、80年代渋谷に照準を合わせることで輪

郭を鮮明に描き出すことに成功した上演論的アプローチは、渋谷に原宿・青山・六本木を代表させることによって導き出されたものであった(吉見 1987: 288-9)。それゆえに、上演論的アプローチは、80年代当時においても、渋谷に限定的に効力を発揮する分析視座であった可能性は否定できない。つまり、上演論的アプローチが取りこぼしてしまった時間—空間あるいは身体感覚の構制が、80年代当時においても存在したのではないか、ということである。

以上を踏まえると、渋谷に代表されるような消費空間の分析視座は、第一に、時系列的に、単線的に変遷していくのか(上演論的アプローチからその他のアプローチへ)、第二に、同時代に異なる分析視座とその有効性が並存しており、それらは効力を発揮する場を次第に移動させていくのか、という二つの可能性を自覚しなければならない。というのも、そうでなければ、90年代以降の都市空間はもちろんのこと、80年代渋谷を代表とする消費空間をも、正確に捉えきれたと言うことはできないからである。このような分析視座の重要性は、上演論的アプローチのみをとった場合に、必ず言われる、90年代以降、渋谷の舞台性が「凋落」したとの指摘に如実に示される。つまり、都市への分析視座が上演論的アプローチに準拠する限り、舞台性がなくなることは否定的なものとならざるを得ない。別言すれば、80年代に依拠した視点から90年代以降の都市を眼差し、それが80年代的でないことが発見されれば、多かれ少なかれ90年代以降の都市は否定的に描き出されることになり、さらには、そこから導き出される90年代論も、否定的な色合いが濃くなるだろう<sup>5</sup>。では、そもそも舞台性の凋落とはいかなる事態であったのか。このことは、まさに凋落を語る言説のうちに示されている。

これまで述べたように、80年代渋谷を讀解する上で有効であった上演論的アプローチも、90年代以降の都市空間を讀み解こうとしたときに、その限界が意識されるようになる。そして、北田の指摘——舞台性の凋落と「情報アーカイブ化」——は90年代以降の都市空間の分析として示唆に富む。しかし、凋落とは、「完全な舞台」とでも呼びうるようなものが追求された果てに、姿を現したのではないだろうか。舞台としての都市空間を演出しようと試みたとき、日常の消費空間からの遮断が必要不可欠であった。それは言い換えれば、特定の都市空間＝舞台に人々を演者として内属させることである。したがって、(舞台性を貫徹させようという)資本と(よき演者として振舞おうという)来街者との共通する欲望が追い求める必然的帰結は、「完全な舞台」であり、それを可能にするのは「内部化」しかあり得ないはずだ。

事実、80年代においては、西武・パルコを代表とする資本は、「完全な舞台」をつくるための内部化戦略を持っていた。ボードリヤールが指摘したような(Baudrillard 1970=1979)消費社会に符合するように、都市空間に記号の秩序をちりばめることを可能にし、「使用価値」からは遊離した意味やイメージで店舗や店舗周辺の都市空間を満たすことを目指し、街をセグメント化し、舞台化していった(吉見 1987: 298)。その戦略は完全には達成されることがなかったが、それゆえに、資本はそこを回遊する人々に「内部」と「外部」の峻別を要求し、そこを訪れる人々も積極的に「内部」のリアリティを見出そうとしてきた(若林 2005: 19)。そして、このような過程で、都市空間に舞台性が付与され、来街者は演者としての能動性を獲得していったのである。

他方90年代以降においては、お台場等で見

られる室内化する空間において、「内部化」が徹底的に推し進められたが、この徹底的に内部化された（都市）空間は「ステレオタイプ化されており、その空間に内在する者が物語の舞台に耽溺するうえで必要不可欠な時間的・空間的な奥行きを欠いている」（北田 2002: 113）ため、演者はただそこを漂うだけの受動的存在となってしまった。つまり、「徹底的な内部化」の果てに目にすることができたはずの「（ディズニーランドのような）夢の王国」にいたることはついに叶わず、残されたものは無力感だったのである（若林 2005: 6-15）。演者は舞台を降り、舞台そのものが解体された。ここで、冒頭で述べた 90 年代以降の渋谷の舞台性の凋落を思い返してみると、「徹底的な内部化」の果ての舞台の解体と、渋谷の舞台性の凋落が同時代的なものであると気づく。一見、矛盾しているようにも映る「完全な舞台の追求」＝「徹底的な内部化」と、「舞台性の凋落」は、むしろ、都市空間に臨む人々の、同一の欲求の異なる側面の現れに過ぎないと捉えるのが妥当であろう。

そこで、本稿は、時代的には 90 年代に限定し、90 年代日本の都市についての社会学的考察は、何を機軸として考察されるべきなのかを明らかにすることを目的とする。時代を 10 年ごとに区切ることにいかなる意味があるのかという疑問もあり得ようが、90 年代の都市の諸相を——否定性においてのみ論じるのではなく——積極的に掬い取る作業を経ることで、それ以降の時代を論じる準備がはじめて整うと考える。それゆえに、80 年代の都市を論じた先行研究に倣い、90 年代の都市を、本稿における守備範囲として設定することになるのだ。また、この作業の過程において、80 年代からの連続と断絶が明らかになり、積極的な 90 年代論を描き出す端緒を見出すことができると考える。

述べたような目的を達成するために、具体的には、本稿は原宿に照準を合わせる。というのも、その理由は、第一に、吉見が原宿・青山・六本木を渋谷に代表させたことを受け、代表としての渋谷が凋落の一途を辿っていると指摘するのであれば、代表されなかった都市に目を転じることで、上演論的アプローチが取りこぼしてしまった（であろう）都市の諸相をすくい上げることが可能となるのではないかと、いう想定による<sup>6</sup>。

また、第二に、より積極的には、中村由佳が、吉見の上演論的アプローチを再検討した上で、裏原宿を取り上げ、ファッションと都市空間のポスト 80 年代性を描き出したことによる（中村 2006）。その要点は以下の通りである。すなわち、その名のとおり原宿を貫く大通りの「裏」に展開する裏原宿は、渋谷のような消費空間のスペクタクル性は排され、セグメント化されたファッション雑誌において可視化される「カリスマ」同士のネットワークと、そこに接続されることを志向する消費者とによる、「ある程度対面的で持続的な友人関係のネットワーク」（中村 2006: 198）が展開される。その上で、スペクタクル性を前面に押し出し、非日常空間として演出された 80 年代の渋谷とは異なり、上演と、述べたようなネットワークこそが、裏原宿を形成するものであり、ここに都市空間のポスト 80 年代性を見ることができると、いう指摘がなされる。このような裏原宿を擁する原宿は、80 年代と 90 年代の連続と断絶を探る際の大きな助けとなるはずである。

さらに、第三に、以上の二点を補強するものであるが、1964 年の東京オリンピック開催以降、若者文化の発信地のひとつとして発展を遂げてきたにもかかわらず<sup>7</sup>、奇妙なことに、これまでほとんど社会学的分析対象とはなっ

なかったことによる。原宿は渋谷の至近に位置するにもかかわらず、また、ガイドブック的語りには枚挙に遑が無いにもかかわらず、一部の実証研究を除いては、言及されることはほとんど無かった<sup>8</sup>。しかし、原宿は渋谷によって代表される説明だけでは不十分であることが予測される。その理由は主に次の二点に整理できる。第一に、ひと口に原宿と言っても、竹下通り界限・表参道・裏原宿等といった、きわめて異質な空間が寄り添って形成されている場であること、第二に、原宿は多くの住宅地を抱え込んでいるということ<sup>9</sup>、である。すなわち、原宿は、来街者相互によっても原宿への意識は異なるであろうし、来街者と従来からの住民との間でも意識が異なっているであろうと予測できるのだ。したがって、80年代渋谷に見られたような分析視座からのみ原宿を理解しようとするには重大な欠陥が存在するであろう、という予測は妥当性を帯びることになる。

本稿では、述べたような前提を出発点とし、具体的には、80年代から90年代の原宿をめぐる「語り」を分析することで、80年代渋谷の至近＝原宿ではなにが起こっていたのかを明らかにしたい。そのことで、80年代都市論が失効しつつある（した）現状において、都市空間を捉える新たな視点を築く足がかりとしたい。そのために、本稿では、80年代から、原宿の商店会が発行してきた統計データを主とする報告、および、大学生が主体となって編集していた「ラブリー原宿」というミニコミ誌に注目し、そこに記されたさまざまな「語り」を見ていくことで、当時の原宿のリアリティを浮き彫りにしていく。

## 2 原宿をめぐる

### 2-1 原宿とはどこか

原宿は、ワシントンハイツの建設と、東京オリンピック開催を契機に、戦後の街の雰囲気決定づけられ（隠田表参道町会 1994）<sup>10</sup>、それ以降は「原宿セントラルアパート」や「パレ・フランス」のオープンなどによって、若者文化とファッションの街への伏線が完成し、竹下通りはローティーン文化の中心地となり、原宿ブランド、クレープ、タレント・ショップといった流行のメディアを次々と送り出していった（隠田表参道町会 1994: 93）。

流行を次々と生み出す一方で、失うものもあった。その最大のもは、原宿という地名であったと言えるだろう（以降、地名としての原宿を「原宿」と表記する。その他の地名・場所と強く結びついた建造物についても同様）。東京オリンピックが開催された翌年、旧来から存在した行政上の地名である「原宿」は、竹下通りが存在する「竹下町」と、表参道を挟んで向かい側の「隠田」とともに、「神宮前一～六丁目」に改正され、新住居表示が施行されることになる。すなわち、1965年以来、「原宿」という地名は行政上、正式には存在しないのだ。

現在の原宿のイメージ（以降、イメージとしての原宿を〈原宿〉と表記する。その他の地名やそれに準ずるものについても同様）ができあがっていく二大契機は、ワシントンハイツの完成と東京オリンピックの開催であることは先に指摘した。ワシントンハイツの完成によってアメリカ文化の素地が出来上がり、東京オリンピックの開催によって、若者文化とファッションの街という現在のイメージが完成に至ったと捉えれば、後に、〈原宿〉へと帰結される視座の完成とともに、「原宿」の喪失があったと考えることができる。

ここで喪失と表現したのは、次のような理由

による。第一に、「現在の町会組織はいぜんとして旧住居表示地区で区分けしており地縁度の深さを感じる」（原宿シャンゼリゼ会 1983: 4）こと、第二に、少なくとも新住居表示の施行時には、原宿住民には、自身の共同体を指す名として「神宮前」が歓迎されたが、それ以降、隠竹町会長が「原宿」という地名を失ったことを後悔していることによる<sup>11</sup>。すなわち、「原宿」から「神宮前」への町名変更は、当時は受け入れられ、むしろ歓迎されたものである。しかし、現在の〈原宿〉のイメージが出来上がっていくにしたがい、内外に向けた自己の提示として、イメージとしての〈原宿〉に沿った原宿が求められていると言える。このことから、〈原宿〉を手に入れるとともに、「原宿」を喪失した、という表現が妥当なものであると言えるだろう<sup>12</sup>。

以上のような経過を辿りながら、原宿は地名としての「原宿」を失いながらも、その存在感を確かなものとしていく。むしろ、地名としての「原宿」を失ったからこそ、イメージとしての〈原宿〉が、本来の「原宿」の範囲を超えて拡大していくことができた、とも捉えることができるだろう。それゆえ、原宿を考察するにあたって、その空間を画定するためには、人びとの、イメージとしての〈原宿〉はどこなのかと問う以外に選択肢は残されていない<sup>13</sup>。

## 2-2 イメージとしての〈原宿〉

イメージとしての〈原宿〉はどこなのかを探ることは、これまでも何度か試みられてきた。ここでは、まず、以下の二つの試みに着目したい。ひとつは、原宿への来街者に対するアンケート調査を元に、メンタル・マップを作成した試みであり（原宿シャンゼリゼ会 1983, 1994）、もうひとつは、原宿住民の生活と福祉についての意識調査（庄司ほか 1988）を元に、

原宿の空間的広がりについての認知をメンタル・マップにおいて捉えようとした試みである（大澤・安立 1990）。前者は来街者、すなわち「外からの視線」が描く〈原宿〉であり、後者は「内からの視線」が描くイメージである。

### 2-2-1 来街者にとっての〈原宿〉

原宿シャンゼリゼ会は、1976年、83年、94年の三度にわたり、来街者を対象として、一般的に言われている原宿とは、どの地域をイメージしているのかを探る試みを重ねている。方法としては、来街者に、白紙の上にイメージする〈原宿〉の地図を、JR(国鉄)原宿駅を中心に描き、その中に知っている限りの店舗を記入してもらおう、というものである。それらの地図を何枚か重ねることで、ひとつの傾向を読み取ることができた、と結論付けている（原宿シャンゼリゼ会 1983, 1994）。

以下に、それぞれの調査で得られた地図を示す。

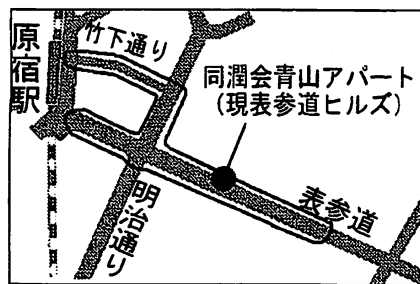


図1 1976年

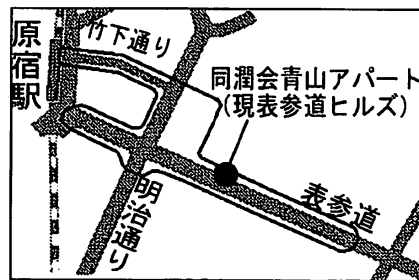


図2 1983年

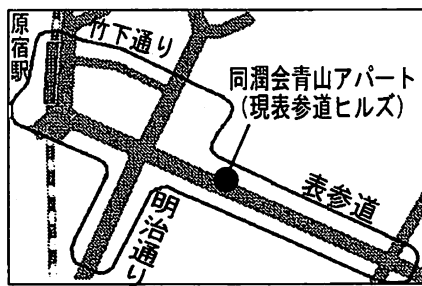


図3 1994年

まず、1976年の調査を元に、原宿シャンゼリゼ会が作成した地図を見ると（図1）、〈原宿〉としてイメージされる範囲は、山手線から同潤会青山アパート（現・表参道ヒルズ）に至るまでの表参道沿い、原宿駅から明治通りに至るまでの竹下通り沿い、両者に挟まれた明治通り沿いに限られていることがわかる。

次に、1983年におけるイメージとしての〈原宿〉を見てみよう（図2）。一見、1976年の範囲と相違ないように思えるが、表参道沿いの範囲が、表参道交差点側に拡大し、さらに、明治通りの東側の地域が〈原宿〉に編入されている。この地域は、現在〈裏原宿〉と呼ばれている地域——大通りの裏道沿いに小規模な店舗が展開している場（中村 2006: 194）——の一部であり、この頃から〈裏原宿〉の萌芽が見られたと言えるであろう。

最後に、1994年におけるイメージとしての〈原宿〉を見てみよう（図3）。調査方法の違いにもよるだろうが、1983年時から一挙に〈原宿〉が拡大している。1983年当時との違いとしては、神宮前交差点から明治通りに沿って、「隠田」にまで拡大していることが確認できる。さらに、竹下通りの裏手（以下〈裏竹下〉と表記）が、ことごとく〈原宿〉に編入されている<sup>14</sup>。〈裏竹下〉も〈裏原宿〉も、「表から裏へ」というトレンドによって成立した空間であり、〈原宿〉

が、「線的拡大から面的拡大へ」と移行したことを示していると言える（原宿シャンゼリゼ会 1994: 49）<sup>15</sup>。

以上のことから読み取れることは、〈原宿〉は、表通りに沿った線的拡大では飽き足らず、徐々に住宅地へと染み出しているということである。〈裏竹下〉も〈裏原宿〉も、もともとは賑やかな大通りの裏に位置する住宅街であり、そこに小規模な店舗が点在していくことによって、徐々に「単なる住宅地」であったその相貌を変化させていく。その結果、〈裏竹下〉や〈裏原宿〉は渋谷などにくらべ、「商業地区としての密度が低く、住空間の中に混在する消費空間」（中村 2006: 194）という独自の性格を帯びることになったのである。

住宅地へと進出していった小規模店舗は、看板広告の類はほとんど掲げず、華やかな演出を避けている。すなわち、店舗と住居の断絶を強調するのではなく、むしろ、店舗-住居の機能の相違により発生する不可避免的な断絶を極力減らし、住空間へと溶け込んでいこうという意図を読み取ることができる。店舗が発信するスペクタクル性によって住宅地の秩序を攪乱するのではなく、むしろ、——すくなくとも店舗経営者の意図としては——住空間と消費空間を調和させ、その調和こそが生み出す当該地区の独自性を保ち、大通り沿いの消費空間や、渋谷などとの差別化を図ろうとしているのである。

以上のことをまとめると、来街者が思い描く〈原宿〉について、「住空間と消費空間の調和する場」としての〈裏竹下〉や〈裏原宿〉が、徐々にその地位を確かなものにしてきたことが読み取れる。またこのことは、——従来からのスペクタクル性を持った消費空間の存在感は依然として残りつづけるが——人々は「住空間と消費空間の調和する場」を、新たな消費の実践の場

として望んでいるということを示唆している。

では次に、原宿住民の、イメージとしての〈原宿〉を確認しよう。

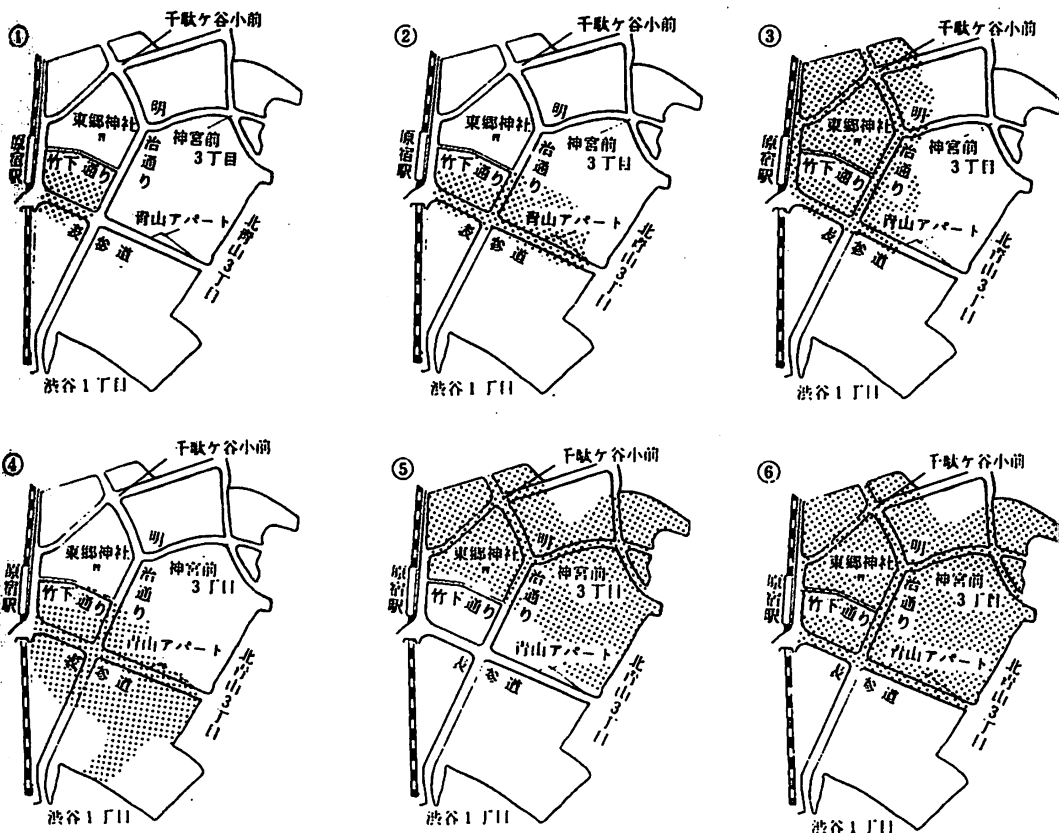
### 2-2-2 住民にとっての〈原宿〉

大澤・安立は、原宿住民の生活と福祉についての意識調査（庄司ほか 1988）<sup>16</sup>を元に、原宿の空間的広がりについての認知をメンタル・マップにおいて捉えようとした（大澤・安立 1990）。大澤・安立の試みの元になった、庄司ほかの調査においては、「原宿の生活と福祉についての意識調査」という名称の調査票からも窺えるように、イメージとしての〈原宿〉の範囲を探ることに主眼が置かれているわけではない。しかし、同調査において、住民自身が考える〈原宿〉とはどこなのか、という設問が用意

されており、そこでは、六つの地図を示し、回答者の実感に合致する地図を選ばせている。具体的には以下のような設問である。

あなたは、「原宿」という地域はおよそどのあたりをさすと思いますか。つぎの地図を参考にして、あなたのお考えに最もちかいものをお選びください。（1つだけ）

- (1) 原宿駅前から明治通りまでの表参道周辺と、竹下通りにかこまれたあたり（地図①）
- (2) 原宿駅前から明治通りまでの表参道周辺と、神宮前4丁目の青山アパート付近（地図②）
- (3) 原宿駅前から渋谷川遊歩道までの表参道周辺と、旧原宿3丁目あたり（地図③）



庄司洋子ほか（1988）より引用

- (4) 旧竹下町と、旧隠田1～3丁目のあたり (地図④)
- (5) 旧原宿1～3丁目のあたり (地図⑤)
- (6) 表参道周辺から旧原宿1～3丁目のあたり (地図⑥)
- (7) その他

そして、(1)-①:9.6%、(2)-②:13.7%、(3)-③:27.8%、(4)-④:7.3%、(5)-⑤:6.3%、(6)-⑥:28.8%、(7):2.9%、という結果を得ている(庄司ほか 1988: 275)。

一見して明らかなように、③と⑥が選ばれる率が高い。これらの選択肢は、ほぼ被調査地区と重なっており、住民にとっての〈原宿〉の広がり、古くからの町会の単位に一致するようなものであることを示唆している。それに次いで②を選ぶものが多いが、これは、原宿の商業的な中心とほぼ一致している。すなわち、大澤・安立が指摘するように、「この結果は、「原宿」という空間を同定する際に、異なる二種類の規準——自治的な単位と商業上の中心——が働いていることを示唆する」(大澤・安立 1990: 73) のだ。

先に、新住居表示の施行に伴って、〈原宿〉を手に入れるとともに、地名としての「原宿」を「喪失」した、と指摘した。大澤・安立は、この事態を「排除されたものの回帰」と表現している(大澤・安立 1990: 78-9)。すなわち、先に引用した隠竹町会の「原宿にしときゃよかった」という後悔が言い表しているように、地名としての「原宿」を排除することには成功したが<sup>17</sup>、明治神宮の神域として、すなわち伝統的な共同体意識として、「神宮前」と名乗ってしまったがゆえに、〈原宿〉が回帰する——モードと消費文化の中心地としての〈原宿〉を認識せざるを得ないような意識が表面化してく

る、ということである。庄司らの調査によっても、その回帰から来るであろう二重の社会意識が、メンタル・マップの選択に表明されていると言ってよい(大澤・安立 1990: 79)。

このことから読み取れることは、原宿住民が二つの社会的現実に葛藤する姿であり、原宿を眺める視線が、「内からの視線(伝統的共同体の社会意識)」と「外からの視線(モードや消費文化の中心地としての社会意識)」とが——単純に交差するのではなく——交錯する場にあるということである(大澤・安立 1990: 79-80)。

ところで、安立は、同じく庄司らの調査を元にした論考において、「内からの視線」と「外からの視線」が交錯する様を、原宿住民が吐露する思いの具体例を挙げることで描き出している。すなわち、原宿住民は、一方で、「外部」からやってきて猥雑な雑踏を作り上げている資本や、消費者が原宿の生活環境を蹂躪していることについて嘆く。だが他方で、街のオルタナティブを構想すると、「国際性ゆたかな…」、「西欧的な(ヨーロッパのような町並み……)」、「文化的な香りのする街」、「自由が丘のように静かに落ち着いていてしかもファッショナブルな街」といった、生活臭を欠いた通俗的なイメージを挙げる。つまり、「いつのまにか街を外側から眺め、第三者として、つまり街に住まう人としてではなく、街を訪れる人間の視線にすりかわってしまっている」のである(安立 1989: 231)。

安立も指摘するように、原宿住民は、街から猥雑さを排除し、より洗練された、より純粋な西欧風の街を望む——それはケヤキ並木が美しく続き、有名ブランド店が建ち並ぶ、洗練されたイメージである〈表参道〉に託されていることはほぼ間違いなく、原宿住民の理想像の収斂



点が〈表参道〉にあることを予感させるものである(安立 1989: 231)。

理想像の収斂点=〈表参道〉にはなにがあるのか。「表参道ヒルズ」である——ただし、それは、後で述べるように、理想像の収斂点としてイメージされる〈表参道〉と等価なものとはならず、〈表参道〉的な原宿住民の「内からの視線」と「外からの視線」の交錯を内に秘めたものとなってしまったのではあるが。

「表参道ヒルズ」は、「同潤会青山アパート」の直上に建設された。そのことを踏まえた上で、「表参道ヒルズ」を設計した建築家・安藤忠雄は、「表参道ヒルズ公式ホームページ<sup>18</sup>」において、設計のコンセプトとして、「同潤会青山アパート」が作り出してきた人々の「心の風景」を、いかに残し、都市の記憶をつないでいくか、ということを強調している。その具体的方策としては、ケヤキ並木と調和し、表参道の勾配を再現することである。要するに、安藤の意図するところは、「表参道ヒルズ」に〈表参道〉を再現することであったと言える。

「表参道ヒルズ」は、「西館・本館・同潤館」の三つの施設によって構成されており、イメージとしての〈表参道〉が再現される「西館・本館」の、店舗エリアとなっているフロアの上に、ケヤキ並木が視界に飛び込む高さにあわせた「ゼルコバテラス<sup>19</sup>」という住居スペースが設けられている。また、歴史的な文脈の維持・再現に充てられた「同潤館」は、その名が示すとおり、「同潤会青山アパート」を再現して建てられた施設である。詳しくは述べないが、「同潤会青山アパート」は、原宿住民によって徹底的に排除された<sup>20</sup>。しかしその一方で、「表参道ヒルズ」の完成に漕ぎ着けた安藤が、原宿住民を代弁して語ることは、「同潤会青山アパート」が作り出してきた風景を残していくことへのこだわ

りだった。その端的な現れが、「同潤館」であり、また、表参道の勾配と連続するスロープであり、ケヤキ並木の高さにあわせた「ゼルコバテラス」であったと言える。以上の構成を踏まえると、「表参道ヒルズ」とは、原宿住民自身の理想像と、来街者の理想像に影響を受けた住民の理想像との葛藤、あるいは齟齬がそのまま現実化したものであると考えるのが妥当である。

「同潤会青山アパート」(とそれが作り出す風景)の排除とその再現は、地名としての「原宿」を排除しつつもその回帰を待ち望んだ、過去の原宿住民の意識を思い起こさずにはいられない。すなわち、先に指摘したように、地名としての「原宿」を排除してしまったがゆえに、モードと消費文化の中心地としての〈原宿〉が回帰した——しかしそれは意図せざる結果であった。その一方で、〈表参道〉に理想像の収斂点を見る原宿住民は、今度は意図的に、排除と回帰の戦略を実行することで、決して理想像の結晶として現実化することはなかったが、「表参道ヒルズ」をつくり上げたのである。

都市の記憶との断絶を減らし、連続的文脈の内に住まうことが許される場としての「表参道ヒルズ」。それは、原宿住民が、理想の〈表参道〉——しかしそれは既存の文脈との決定的な断絶を含まない、むしろ既存の文脈との調和を前面に押し出した〈表参道〉——を追い求めた結果、葛藤や齟齬を含みつつも、ひとつの答えとして提示して見せたものだったのである。こうして、「内からの視線」と「外からの視線」は、理想像の収斂点において、ひとつの像を結ぶことになった。

## 2-3 「ラブリー原宿」の記事を読む

### 2-3-1 80年代的消費社会論 - 者から見た〈原宿〉

原宿には、1981年から、大学生が主体となって編集する「ラブリー原宿」というミニコミ誌があった。「ラブリー原宿」は、街と来街者のコミュニケーションツールであり（原宿シャンゼリゼ会 1994: 18）、企画・編集・取材を行って行く大学生自身は、街と来街者——ときには街と在住者——のあいだに立つ、媒介者として位置づけられると言ってよい。毎月定期的に発行されてきた「ラブリー原宿」は、毎号がわずか数ページ程度の「新聞」ではあったが、「原宿」に関する情報の機械的な提示を目的とはしておらず、毎号持ち回りで編集を担当する大学を変え、それぞれの大学の学生が、それぞれ異なった視点で、思い思いの企画・体裁で作りに上げていくという点に特徴がある。

さて、「ラブリー原宿」には、80年代的消費社会の中心的位置にいた人物へのインタビューが掲載されている。それらのインタビューの中から、特に現在でも80年代的消費社会の体現者と目されるであろう、糸井重里と田中康夫のインタビューを取り上げてみたい<sup>21</sup>。両者を80年代的消費社会論-者とみなしたとき、彼らの目に原宿はどのように映ったのであろうか。

まず、1981年の時点で、12年間原宿で生活が続けてきたことになる糸井は、インタビューにおいて、わざわざ原宿を生活の場として選択する必然性を感じておらず、原宿に積極的な思い入れを持っていないと思えるような受け答えを繰り返す。それゆえに、積極的な〈原宿〉イメージを持ち合わせておらず、比較対照となるような街を思い浮かべることができない。さらには、住宅地を抱える原宿の将来について問われると、「その辺はもう原宿じゃないのよね。今原宿って表通りだけでしょ。……あの辺ってそういう影響は受けないんじゃない」と答え、

最終的には、「(特別な感情は)ないね。……みんなが原宿はいいとかやだとかいうから、うるさいなあと思って……住んでる人ってそんなこと考えてないんだよね」と結論付けている<sup>22</sup>。

次に、同じく1981年に行われた田中へのインタビューを見てみたい。田中は、いったんは原宿への思い入れや、固有性を提示してみせるが、渋谷との比較対照をしつつ原宿の未来について予想すると、なお原宿の固有性を認めつつも、渋谷へと接近する街としての原宿が思い描かれることになる。田中は渋谷は画一化していると述べたうえで、原宿の未来を問う質問に対し、「原宿は、安定した街として、段々と、渋谷っぽくなっていくんじゃないんですか」と答えている。その上で、「(大型商業施設が存在しないことを指摘し)それに、脇に入ればすぐ、住宅はあるし。だから渋谷や、新宿の様には、すぐにはならないのかもしれないけど」と結論付けている<sup>23</sup>。田中が語った1981年当時の原宿は、竹の子族の存在などもあり、自由なファッションに身を包み、楽しむことができる街として、田中自身も認識していた。しかし、その一方で、原宿の未来を語ると、「画一化」している街として批判されたはずの渋谷へと接近していくことが予想されている<sup>24</sup>。

さて、糸井と田中のインタビューを通じて、両者が共通して指摘していることは、原宿の未来像を思い描いたとき、〈原宿〉的なるものが将来にわたって育っていくことは困難である、ということである。このことは、すなわち、——糸井のインタビューに特に明確にあらわれているが——1981年当時においても、すくなくとも80年代的消費社会論-者の目には〈原宿〉的なるものを見出すことは困難であったことを意味するのではないだろうか。その一方で、インタビューにおいて渋谷への言及があると、明

確に〈渋谷〉的なるものを語り始める。しかし、〈原宿〉的なるものを語ることの困難の裏面では、両者ともに、実は、取りこぼしていた〈原宿〉的なるものを指摘しているのではないだろうか。それは、原宿に「住む」という選択肢が存在しているということであり、事実、大通りを一歩入れば、住宅地区が広がっているという現実である。

通常、商業地区こそが都市空間の「顔」であり、消費が実践される舞台である。来街者はそうした商業地区を遊歩するのであり、そこに隣接する住宅地区は、積極的な意味を持たない余白とみなされる。渋谷は特に、西武・パルコ資本が手がける商業地区の空間演出により、遊歩者の舞台が整えられていった<sup>25</sup>。そのような、渋谷を代表とするような都市空間像を準拠点とする限りにおいて、——〈渋谷〉的なるものに依拠しながら他の都市空間を眼差す限りにおいて——住宅地区という「外部」へ大きく開かれている原宿のような都市空間を把握するにあたって、大きな困難が伴うことになる。

### 2-3-2 住宅地区の中の原宿

しかし、引き続き「ラブリー原宿」の記事を追っていくと、原宿の繁華街が住宅地区に突如出現したことが指摘されている<sup>26</sup>。しかも、繁華街には小売店、レストラン、喫茶店等の設備のみが存在し<sup>27</sup>、それらの店舗は、小規模なものを中心であり、住宅の一部を店舗としたものも多い<sup>28</sup>。このことも原宿の特徴のひとつをなしていると言える。

糸井と田中のインタビューを振り返ると、糸井は、住宅地区について原宿を構成する一部としてなんら意味を見出しておらず、田中も、原宿が渋谷や「新宿」のようになるためには、住宅地区が障害となりうることを示唆している。

しかし、現実には、住宅地区が余白や障害としてあるのではなく、むしろ、余白や障害と目に映るような住宅地区からこそ、原宿の街が立ちあられてきたのである。このように捉えると、〈原宿〉的なるものとは、住宅地区に広がる小規模店舗が織り成す光景であり、そこに「住む」人々と隣り合わせの感覚を不可避的に抱かせるような街の構成なのではないだろうか。

これまで、「ラブリー原宿」の記事を追うことで、いくつかの点を確認することができた<sup>29</sup>。第一に、〈渋谷〉的なるものに依拠した80年代的消費社会論の文脈では、〈原宿〉的なるものを捉えきることができないということ、第二に、〈原宿〉的なるものの主要な構成要素として、「住む」ということが存在しているということである。このことは、これまでの〈原宿〉イメージの検討で明らかになったことと符合する。

### 2-4 小括

本章における〈原宿〉イメージの検討から、以下のことを指摘できる。それは、イメージとしての〈原宿〉を探ることで明らかになった二つの「戦略」は、しかし、あるひとつの欲求に端を発しているのではないだろうか、ということである。すなわち、地理的・歴史的な断絶を減らそうとする欲求である<sup>30</sup>。

「外部」との断絶が成功裏に機能していた80年代の渋谷は、やがてその舞台性を失っていった。90年代以降のお台場をはじめとする室内化した都市空間においては、「内部」と「外部」の徹底的な断絶が、もはや無力感しか呼び起こさず、80年代的戦略の徹底としての試みは、失敗に終わってしまった。その一方で、地理的・歴史的な断絶——すなわち「内部」から見たときの「外部」——との断絶を減らそうとする「戦

略」が、原宿において成功を収めることになる。

このように、小規模店舗が住宅地に溶け込んでいくとき、また、安藤が「目指すのは、表参道の同潤会アパートの、次の時代への『再生』である」と宣言するとき、調和が実現する都市空間において人々は、「擬似居住者意識<sup>31</sup>」とでも呼びうるものを欲しているといえるのではないだろうか。さらには、「ラブリー原宿」の記事から明らかになったこと、すなわち、80年代の〈原宿〉的なるものの主要な構成要素として、「住む」ということが存在しているということからも、「擬似居住者意識」を指摘することができるだろう。

通常、住宅地区へと足を踏み入れるということは、すくなくとも三つのことを意味している。第一に、その地域の住人であるということ、第二に、その地域の顔なじみであるということ、第三に、その地域の微細な地理感覚まで有していること、である。住宅地区へと溶け込んだ〈原宿〉を遊歩する来街者にとって、第二、第三の条件は満たされる。しかし、当然のことながら、来街者であるがゆえに、第一の条件は決して満たされない。したがって、第一の条件は、「その地域の住人の感覚を持つ」ことで補完されるほかは無い。このような機制によって生じてくる意識が、来街者の「擬似居住者意識」とでも呼びうるものではないだろうか。

### 3 〈ささやかな家郷〉—— 80年代と90年代の都市空間の連続と断絶

これまで、原宿において、人びとが「擬似居住者意識」を欲していることを指摘した。このことを踏まえ、最後に、当初の問いに戻り、80年代と90年代の都市空間の連続と断絶を整理し、積極的な90年代論を描くための端緒

を導き出したい。

吉見は、『都市のドラマトウルギー』（1987）において、——神島二郎（1961）や見田宗介（1971, 1979）の〈家郷〉の概念を援用しつつ——浅草・銀座・新宿・渋谷といった「盛り場」について、異なる二つのレベルの構制のされ方を描き出す。すなわち、第一には、「盛り場」を秩序づけている時間—空間のレベルであり、第二には、そこに集うひとびとの身体感覚のレベルである<sup>32</sup>。その上で、「全体社会・生活世界の構造的変容」を明らかにしていくことになるわけだが（吉見 1987: 330-1）、その過程で明らかにされるのは、「先送りされる〈未来〉」（非場所的・個別化的）としての銀座・渋谷、「幻想としての〈家郷〉」（場所的・共同化的）としての浅草・新宿という都市化の二極面であり、「東京という都市は、この二つの極を媒介する様々な形式を、そこに集合した人びとに提供してきた」ということである（吉見 1987: 332-3）。また、〈渋谷〉的なるものの展開に際して、〈銀座〉的なるもので見られた「西洋」をそのイメージの源泉とする〈未来〉の単一性は解体され、「〈未来〉の半ばアドホックな演出により、われわれの生活世界は、〈眺める〉という契機を希薄にさせたまま、次第に〈演じる〉という契機を突出させていく」（吉見 1987: 341）。

ここで注意すべきことは、——吉見も強調するように——〈演じる〉という契機の根源には、〈未来〉の単一性の解体と〈家郷〉の観念の転回が潜んでいるということである。とくに、〈家郷〉については、実在する〈家郷〉＝〈第一の家郷〉の喪失を受けて、都市空間において〈第二の家郷〉が形成される点を重視したい。それはさらに新しい〈（第一の）家郷〉にもなりうるし、〈ささやかな家郷〉にもなりうるのだ。

しかし、〈渋谷〉的なるものは、何らかの共同性への希求を含んだ〈ささやかな家郷〉をも解体する方向へと向かい、「〈未来〉の半ばアドホックな演出」に満ちたものとして、〈渋谷〉的なるものが立ち現れてくることになるのだ（吉見 1987: 338-41）。

以上の吉見の図式化に〈原宿〉的なるものを位置づけると、以下のようになるだろう。すなわち、原宿において「擬似居住者意識」を欲した人びとは、〈原宿〉的なるものに〈ささやかな家郷〉を見ていたのではないだろうか、ということである<sup>33</sup>。しかし、それは、〈未来〉の半ばアドホックな演出との決別を単純に意味するのではない。というのも、90年代以降の渋谷の舞台性は凋落したとしても、ブランドショップをはじめ、様々な服飾店が立ち並ぶ、表通りとしての「表参道」や「明治通り」を見るだけでも、そこではいまだ、差異化の試みを競い合う「舞台性」を読み取ることができるからだ。すなわち、80年代から90年代へと時代が下ることで、都市空間が、〈未来〉の半ばアドホックな演出から、〈ささやかな家郷〉へと全面的に移行したと判断することはできない。ただし、明瞭な異質性を孕んだ空間を内包する原宿を検証することで、「舞台性」を主とする都市空間の80年代性が連続する一方で、「擬似居住者意識」として指摘した都市空間の新たな展開が着実に進行していることが明らかになった。

ここで留意すべきことは、都市空間の90年代性は、後者の展開のみに存在するのではない、ということである。確かに、後者の新たな展開は、80年代の都市空間においては顧みられることはなく、その意味では、それは80年代の都市空間との断絶であるが、その一方で、前者の80年代性は連続している。しかも、両者は原宿において隣接して存在している。このこと

から、都市空間の90年代性は、両者が互いを排斥しあうことなく、80年代の都市空間からの連続と断絶を共存させるものとして捉えるべきである。もちろん、都市空間の90年代性の核心は、「擬似居住者意識」を欲し、〈ささやかな家郷〉を見る人びとの存在にあるのだが、それらの人びとは、都市空間を〈ささやかな家郷〉で覆い尽くす志向性を持たず、むしろ、「舞台性」を主とする都市空間のシニカルな肯定を媒介として、〈ささやかな家郷〉を見ることが可能となっているとも言える——〈裏原宿〉に象徴的に現れているように、「表」あってこそその「裏」なのだから。その意味で、都市空間の90年代性に欠くことのできない〈ささやかな家郷〉は、80年代的都市空間に依拠することではじめて明らかになるものであり、この意味でも、都市空間の90年代性は、80年代からの連続と断絶をともに孕んでいるものと考えられる。

さて、中村（2006）が指摘するように、また、さまざまなメディアで飛び交う「通称」として時折聞かれるように、渋谷の周縁部に位置する道玄坂上、円山町、宇田川町、松涛、神泉などのエリアを、「奥渋谷」・「裏渋谷」などと呼びあらわされることがあり、近年注目を集めている。このエリアも〈裏原宿〉と同様に、住宅地区の中に小規模店舗が点在する空間となっており、渋谷においても、「裏」の興隆が見られる、とすることができる。また、東京郊外に位置する千葉県柏駅東側の、デパートや複合商業施設の裏側には、「裏原宿」になぞらえて「裏柏<sup>34</sup>」と呼ばれるようになったエリアが、住宅地区の中に形成されていくことになった。以上のことから、即座に、「擬似居住者意識」と〈ささやかな家郷〉の「拡散」——郊外も含めたさまざまな地域における展開——を指摘することは早計と言わざるを得ないだろう。本稿では、くさ

さやかな家郷〉の成立までを追うことを守備範囲とし、それ以降の展開の丁寧な考察は、本稿以降の課題としたい。

これまでの議論を図式化すると、以下のようになる(図4)。

図4を時間軸に沿って概述すると、まず、都市化の進行以前の〈家郷〉の存在が前提となっている<sup>35</sup>。そこから70年代、80年代へと時代が下ると、〈家郷〉から、〈ささやかな家郷〉を否定する方向へと向かう〈舞台〉が展開する。その一方で、〈ささやかな家郷〉が展開する萌芽が見られ始め、90年代に入ると、〈舞台〉のシニカルな肯定を媒介として、〈ささやかな家郷〉が明確に展開することになる。

#### 4 結

前章の図4に原宿を位置づけると、〈舞台〉の円と〈ささやかな家郷〉の円が交わる範囲、ということになる。というのも、原宿には、従来からの居住者がいるという意味で〈家郷〉でもありうるし、大通り沿いの〈舞台〉も存在し、〈裏原宿〉のような〈ささやかな家郷〉も存在するからだ。その意味で、原宿はきわめて特異な都市空間であると言えるが、その特異な都市空間の構制を丁寧に検証することで、90年代

の都市空間において、80年代的都市空間の連続としての〈舞台〉が存在しつづける一方で、「擬似居住者意識」と結び付けられた〈ささやかな家郷〉が意味を持つことを明らかにできた。原宿という限定された領域に、〈舞台〉と〈ささやかな家郷〉が並存することで、80年代から90年代への都市空間の変遷として、単純に前者から後者への移行であったと見るのではなく、〈舞台〉と〈ささやかな家郷〉との連続と断絶が確認できたのである。そのことを踏まえて、最後に、都市空間の時代的変遷について、一定の図式化を試みることができたと考える。

本論を閉じるにあたって、本稿以降の課題を提示しておきたい。前章において、今後の課題として、「擬似居住者意識」と〈ささやかな家郷〉の「拡散」を指摘した。その一方で、北田が渋谷の舞台性の凋落＝情報アーカイブ化を指摘するとき、情報メディアを取り上げつつ、90年代末頃からの、郊外の中規模都市——柏、大宮、町田、立川、相模大野など——における「プチ渋谷」化<sup>36</sup>をその証左としたこと(北田2002:126-7)に注目すると、「表」としての〈渋谷〉、すなわち、「舞台」としての〈渋谷〉が「拡散」していったことが指摘できる。〈渋谷〉という「舞台」で「演者」として振舞っていた人びととの

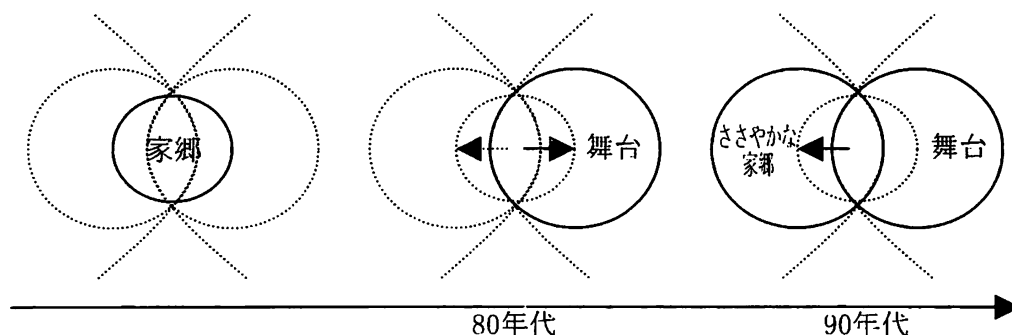


図4 都市空間の時代的変遷

対比で言うならば——さらに「擬似居住者意識」とくささやかな家郷」になぞらえて言うのであれば——、「プチ渋谷」において、「擬似演者意識」を持った人々が、くささやかな舞台」を享受していると言うことができないだろうか。そして、その裏面において、それぞれ「裏」として位置づけられるエリアが、さまざまな地域に「拡散」していった、と考えられないだろうか。試みに、前章の図4にこの展開を位置づけると、以下のようにあるだろう（図5）。

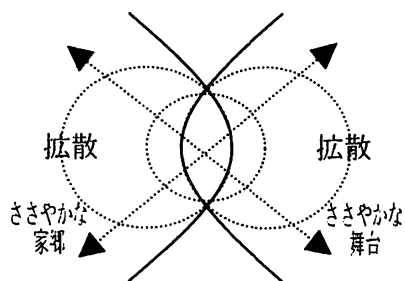


図5 「拡散」する都市空間

図5は、もはやくささやかな家郷」もくささやかな舞台」も、その展開のためには特定の領域に限定される必要はなく、また、便宜上いったんは引いた境界線（双曲線）を軽々と乗り越え、「擬似居住者」と「擬似演者」が——くささやかな家郷」やくささやかな舞台」をつくりながらも——「拡散」していくことを示している。そして、これらの人びとの動きこそが——90年代において「舞台」のシニカルな肯定としてくささやかな家郷」が生じてきたような、明確なベクトルを持った都市空間の展開とは異なり——くささやかな家郷」とくささやかな舞台」のあいだを絶え間なく振動しつ、都市空間が「拡散」していく様をも示している。本稿以降において、以上の展開の端緒を探り、本章においては都市空間のポスト90年代性としてしか表現できていない諸相の、その独自性を導き

出す作業が必要となるだろう<sup>37</sup>。

## 注

<sup>1</sup>たとえば、前田（1982）、陣内（1985）など。

<sup>2</sup>吉見（1987）を代表として、中野（1983）など。

<sup>3</sup>「消費者はもはや特殊な有用性ゆえにあるモノと関わるのではなく、全体としての意味ゆえにモノのセットとかかわることになる」（Baudrillard 1970=1979: 14）という記述が物語っているように、ボードリヤールは、生産＝効用の論理からは逸脱的に目に映る事態を消費社会として描き出す。そこでは、生産者はモノに意味やイメージを付加し、消費者は、モノが生み出す意味やイメージの微細な差異を追い求めることになる。

<sup>4</sup>北田暁大は、90年代以降の渋谷の舞台性は凋落し、人々は舞台性が存在するために渋谷に集うのではなく、もはやそこでは消費活動における利便性が第一に追求される場となってしまったことを指摘し、そのことを渋谷の「情報アーカイブ化」として分析している（北田 2002: 124-34）。この点に関しては、北田自身が一定の回答を試みている（北田 2007）。北田は、吉見（1996）と阿部潔（2006）が、それぞれ微妙な相違を孕みながら論じる「テーマパーク化」に注目し、閉じた領域を前提とするディズニーランド的な「共同幻想としてのテーマパーク」と、人びとが「快適」とみなす「環境」を再生産していくメカニズムとしての「人工環境としてのテーマパーク」といった、テーマパークの論理の二義性を指摘する。その上で、この十数年で、テーマパークの論理の重心が前者から後者へと移行し、それゆえに、「渋谷」の舞台性の凋落は、この重心移動の現われであったと分析する。

<sup>5</sup>この否定性——ネガティブな時代としての90年代——は都市という限られた領域を覆うだけではない。理念型としての渋谷と、それを理念型とみなす

視座の失効という語られ方とは別種の否定性ではあるが、主として日本経済の劇的な変動——バブル経済とその崩壊——を受け、90年代は「失われた10年」として、やはり否定的な解釈を施される。さらには、阪神大震災やオウム真理教による地下鉄サリン事件、凶悪少年犯罪への不安感の昂進といったことも、90年代に否定性を色濃く上塗りする。すなわち、都市のみならず、さまざまな領域に否定性が偏在する時代としてのみ、90年代が描かれる傾向が見られる。

<sup>6</sup> そうであるならば、原宿以外の青山・六本木をも同様に目を向けなければならないのは当然であるが、便宜上、本稿では原宿のみに照準を合わせることになる。もちろん、本稿は、80年代渋谷を理念型として描き、そこからの「逸脱」を否定的に語ることを批判した以上、90年代原宿を理念型として措定し、そこからの「逸脱」を断罪するようなことを目的とするものではないし、そうすることはゆるされないと考える。

<sup>7</sup> 後にも述べるように、ワシントンハイツの建設と、東京オリンピックの開催を契機に、戦後の原宿の雰囲気が決定的に決められた（隠田表参道町会 1994: 92-3）。

<sup>8</sup> かつて原宿にキャンパスを構えていた日本社会事業大学の研究者を中心に、社会学的実証研究がなされていた（たとえば、庄司ほか（1988）、安立（1989）、安立・大澤（1990）、大澤・安立（1990）など）。また、原宿住民の視点からは、資料的価値の高い報告も見られる（たとえば、原宿シャンゼリゼ会（1983,1994）など）。しかし、それ以降のまとまった研究を見ることはできない。現在もなお原宿を社会学的な題材として取り上げている研究は、〈裏原宿〉に限ったものではあるが、中村（2006）、難波（2006）などがある。

<sup>9</sup> 1967年の渋谷区文教地区指定と、1973年に多くの地区が第二種住居専用地区に指定されたことによ

る影響が大きい。

<sup>10</sup> ワシントンハイツは、福生や横須賀などの、いわゆるGIたちの米軍基地とは違い、士官クラスの人々の宿舎であったがゆえに、原宿には中上流のアメリカ文化が育ち、異国情緒溢れる独特のイメージが定着していくことになった。また、東京オリンピックの開催によって、道路拡幅・新設が行われ、急速に街が近代化していくとともに、外国人選手向けの洒落たレストランが次々と建設された。オリンピックが終わってもその雰囲気は失われることはなく、〈アメリカ文化の香のする街〉に憧れる若者を引き寄せ、それが「原宿族」を生み、〈ヤング・カルチャーの発信地〉となっていった（隠田表参道町会 1994）。

<sup>11</sup> 大澤真幸と安立清史は、新住居表示施行の経緯を振り返り、以下のように指摘する。『『神宮前』は、明治神宮が作られた後に意味をもつ名だから、もちろん、この地で育った共同体の本来の名ではない。『原宿』の方が、はるかに古くから使われていた。にもかかわらず、奇妙な逆立が生じ、少なくとも昭和30年代のこの地の人々には、自身の共同体を指す名として、あとからできた『神宮前』が好まれた。共同体は、自身のアイデンティティを、明治神宮（天皇）に仮託し、その神域にあるものとして自らを内外に向けて提示したのである。しかし、再び逆転が生じており、隠竹町会長は、町名を、古くからの共同体の名である『原宿にしときゃよかった』と後悔している」（大澤・安立 1990: 78-9）。

<sup>12</sup> 現在公的施設で「原宿」という名が残っているものは、確認できるものだけで、原宿駅、原宿外苑中学校、原宿変電所、原宿駅前郵便局だけである。

<sup>13</sup> しかしながら、本稿は、主として人文主義地理学によって位置づけられるような空間研究ではない。したがって、原宿についての「物理的空間」、「言説空間」、「物理的空間についての言説」を峻別していくことを目標とするものではないし、原宿の空間



構造を精査していくことを目指すものでもない。

<sup>14</sup> 竹下通りは、本来、閑静な住宅街の生活道路に過ぎず、昭和30年代に入っても平屋が多く、ようやく昭和47年頃にビルが点々と建ち始めた後、昭和49年「パレ・フランス」オープンによって、人通りが増え始めた。その竹下通りを起点として、「ブラームスの小径」、「フォンテーヌ通り」、「モーツァルト通り」を始めとして、〈裏竹下〉に張り巡らされた狭隘な路地（遊歩道）にも、小規模な店舗が増えていき、賑わいを見せるようになった（隠田表参道町会1994:30）。

<sup>15</sup> なお、現在〈裏原宿〉と呼ばれている一帯を初めて〈裏原宿〉と呼んで記事にしたのは、1995年1月発行のファッション雑誌『ポパイ』である（中村2006:194）。原宿シャンゼリゼ会の最後の調査は1994年であるから、〈裏原宿〉の雑誌メディアによる紹介後に同様の調査を行えば、より〈原宿〉の拡大が反映された結果を得ることができたのではないかと予想される。

<sup>16</sup> 調査対象地域は、ほぼ原宿三丁目会が覆う場所であり、神宮前一丁目全域、および神宮前二丁目、三丁目、四丁目、そして千駄ヶ谷三丁目の一部地域である。この地域に居住する18歳以上の人々約5,000人について、渋谷区住民基本台帳から1/4サンプリングにより1,026名が抽出され、有効票510票が回収されている（郵送法による）。回収率は48.1%である（庄司ほか1988:244）。

<sup>17</sup> 註12でも触れたように、公共施設には今なお原宿という名称が残っている。この意味で、地名としての「原宿」の排除は不完全なものでしかなく、特に、〈原宿〉にとって——来街者も在住者も多くはそこを経由せざるを得ないという点において——機能的・象徴的に大きな意味をもつ原宿駅の存在は、この排除の不完全性を生々しく露呈している。

<sup>18</sup> <http://www.omotesandohills.com/>

<sup>19</sup> 「ゼルコバ (zilkova)」はケヤキの学名、zilkova

serrata にちなんだものであることは明らかであろう。

<sup>20</sup> 地域における記念碑的建築物の取り壊しに際しては、地域内外から反対運動が発生することはしばしばあることだが、「同潤会青山アパート」については、1997年6月の、管理組合法人総会において早期建て替えの推進が決議されて以降、散発的に、それも主として地域外の有志による反対活動が見られただけである。2001年12月17日に渋谷区が開いた「神宮前四丁目地区第一種市街地再開発事業に係る都市計画（原案）に関する説明会」においては、地元の人々の意見として、「早く建て替える」というものが主流であり、「子供の頃からここで遊んだので、思い出深い建物だが、いまや感傷にひたっているときではない。老朽化がひどく、危険きわまらない」という主旨の意見が噴出した。また、当初は「同潤会青山アパート」の一棟のみを残す予定であったが、それに対しても住民の反対があった。

<sup>21</sup> もちろん、両者のみが中心人物ではないが、糸井は、80年代渋谷の消費社会を主導していった西武百貨店・パルコのコピーを手がけており、80年代的消費社会を駆動する中心人物のひとりであったことは疑いようもない。また、田中は、1980年に『なんとなくクリスタル』を執筆し、80年代の都市を遊歩する人びとのふるまいを執拗なまでに描いたことで注目され、80年代的消費社会に言及する上で忘れることのできない人物である。

<sup>22</sup> 早稲田大学広告研究会，1981，『ラブリー原宿』原宿シャンゼリゼ会，2。

<sup>23</sup> 明治大学広告研究部，1981，『ラブリー原宿』原宿シャンゼリゼ会，5。

<sup>24</sup> ここでの「画一化」とは、記号的な差異と戯れる人びとがまとう「すでにその意味を予定された『個性』」（吉見1987:348）のことを指し示していると考えるのが適当である。すなわち、80年代的消費社会においては、様々なレベルのメディアの組み合わせが、人びとがその都市空間においてどのような

ファッションを採用し、振舞うべきなのかを指示してくることで、予定調和の「個性」をまといながら都市空間を遊歩することになるのだ。したがって、ここでは、「画一」的であることと「個性」的であることは矛盾しないのである。

<sup>25</sup> もちろん、西武・パルコ資本による空間演出があったとしても、実際には雑多な要素に満ち溢れ、「外部」に開かれていたのであるが、「当時そこに群れ集まっていた人びとも含め、多くの人はそこにパルコの的なものだけを見ようとしたし、パルコ＝西武資本もまたそうしたものだけを見せようとしてきた」（若林 2005: 19）のである。すなわち、「外部」に開かれていようと、住宅地区をはじめとするさまざまな「外部」には、積極的に意味を見出すことはなかったのである。

<sup>26</sup> 東京大学広告研究会，1982，『ラプリー原宿』原宿シャンゼリゼ会，11。渋谷郷土文化館の新川一男の「原宿はもともと何もなかったところで、東京オリンピック（64）以前はただの住宅街だった。それが64年にコープオリンピアが出来たのを機に、在日外人向けの横文字の店が並ぶようになり、それが若い人、特に女性を惹きつけたんです。表参道のケヤキ並木の魅力とあいまって、多くの若者が原宿を歩くようになり、それで現在の商店街に発展する素地ができたんです。……竹下通りなんて、本当にただの住宅街だった。あれは本来生活道路ですよ。それが十年程のあいだに、あんなに豹変してしまったのですから、驚くばかりですね」という証言などがある。

<sup>27</sup> 註9においても触れたが、住宅地区が広がる中に商業地区が「侵食」するように展開していった経緯には、行政的判断も介在する。地域地区制による「商業地域」は、明治通り沿いと、原宿駅から旧同潤会青山アパート（現在、表参道ヒルズが位置する場所）にかけての表参道沿いに限られ、原宿駅前

や、旧同潤会青山アパート以東の表参道は「近隣商業地域」である。また、竹下通りを含む神宮前一丁目は、ほぼ全域が「第二種住居専用地域」であり、その他の地区にも「第一種住居専用地域」、「第二種住居専用地域」、「住居地域」が広がっている。このため、多くの店舗は、用途制限、高度地区規制、建ぺい率・容積率規制、日影規制などをうけ、必然的に住宅地区の中に小規模な店舗が展開していくことになる。

<sup>28</sup> 註27参照。

<sup>29</sup> なお、「ラプリー原宿」では、ときおり「原宿に住むこと」を案内した記事が掲載されている。たとえば、直接的には、「原宿に住みたい！」（東京大学広告研究会，1982，『ラプリー原宿』原宿シャンゼリゼ会，11号。以下、すべて『ラプリー原宿』からの引用）、「原宿に住みたい」（学習院大学広告研究会，1983，16号）などの記事があり、また、実際に「原宿」に住んでいる人々へのインタビュー記事、「われらはらじゅくげんじゅうみん」（日本社会事業大学広告研究会，1981，4号。同潤会青山アパート管理人、明治神宮前派出所の警官等へのインタビュー）、「原宿 A to Z」（早稲田大学広告研究会，1982，10号。東郷女子学生会館の居住者へのインタビュー）、「特別講演“青山アパートのおはなし大好きおじさん”のちょっとひとこと学」（東京大学広告研究会，1982，11号。同潤会青山アパート居住者組合組合長へのインタビュー）などの記事が見られる。これらにあらわれているのは、「住む」ということを媒介にした、来街者と在住者とのかかわりあいである。すなわち、在住者が来街者の存在を意識せざるを得ないのと同様に、来街者も在住者を意識せざるを得ないのである。

<sup>30</sup> 以上のような欲求とは、もともと原宿に備わっていたものであるのか、それとも、80年代渋谷に見られたような消費社会論的振る舞い——差異化のゲーム——の果てに見られるようになったもの

なのかは、丁寧に検証する必要がある。

<sup>31</sup> 原宿住民の理想像の収斂点であると指摘した「表参道ヒルズ」の成立から、「擬似居住者意識」を指摘することは適当ではない、すなわち、それは「擬似」ではないと指摘されかねないが、住民の「内からの視線」と「外からの視線」は、「表参道ヒルズ」において像を結んだことに留意する必要がある。

<sup>32</sup> この方法論については、吉見は随所で明言しているが、特に吉見（1987: 310）において、簡潔に要約がなされている。

<sup>33</sup> 中村は、〈裏原宿〉に定位することで、80年代の都市の消費空間との連続と断絶を読み取り、そこでは「上演とネットワークが同時に現れている」（中村 2006: 198）と結論付ける。このネットワークは、「カリスマ」を媒介とし、消費者までも巻き込んだ、継続的な相互関係によって形成されたものである（中村 2006: 198）。したがって、〈裏原宿〉は、「〈未来〉の半ばアドホックな演出」によって構成されたものというよりも、「〈現在〉の継続的なネットワーク」によって構成されていると言え、何らかの共同性に依拠することで、〈ささやかな家郷〉を支える方向へ向かったと言える。なお、中村によれば、この「カリスマ」とは、セグメント化された雑誌媒体を介して、理想的であると同時に身近な存在でもある準拠者として特権的立ち現れてくる存在——スタイリスト、バイヤー、ファッション・ライター等——であり、その「カリスマ」を通して提供されるファッション・イメージは、より具体的に日常性に関係付けられている、とされる（中村 2006: 196-7）。

<sup>34</sup> 〈裏原宿〉同様、〈裏柏〉という正式な地名は存在しないため、この呼称がいつから用いられるようになったのかは定かではないが、柏商工会議所を中心に、ホテルや大型店などと市が協力して作った「柏市インフォメーション協会」が運営する「かしわインフォメーションセンター」は、2003

年の秋から、『URA-Kashiwa MAP』を作成し、内外に向けて〈裏柏〉をアピールしている（<http://www.86kashiwa.net/>）。また、毎回テーマとなる都市についての「ベスト 30」が提示される、テレビ東京系列の番組『出没！アド街ック天国』において、柏は過去二回取り上げられているが（1998年11月21日と2005年5月14日）、1998年の紹介時には〈裏柏〉はランクインしていないが、2005年の紹介時には、15位にランクインし、以下のように紹介されている：「現在、柏には古着屋、カフェ、雑貨屋さんだけでその店舗は100軒を超えます。1997年頃から裏原になぞらえて、裏柏（ウラカシ）とよばれるようになりました。1989年オープンの「FREAKS STORE」は柏で1番古い古着屋です。ウラカシの草分け的存在です」（<http://www.tv-tokyo.co.jp/adomachi/>）。

<sup>35</sup> 見田（1971）と、それをもとにした吉見（1987）において指摘されている「新しい〈家郷〉」は、図7においては省略している。

<sup>36</sup> 先に指摘したように、柏は〈裏柏〉という呼称を与えられているエリアを擁する一方で、柏駅前の大型商業施設が建ち並ぶエリアは「東の渋谷」、「プチ渋谷」などと称されている。このことを考えると、柏は原宿や渋谷と同様に、「表」と「裏」を擁する都市であると判断できそうである。しかし、かしわインフォメーションセンターによると、「若者の街」という側面を強く持つようになるのは、1998年頃からであり（<http://www.86kashiwa.net/>）、前註で指摘したように、〈裏柏〉と「東の渋谷」・「プチ渋谷」化が内外から自覚的に意識されるようになるのはほぼ同一の時期であることに留意すると、確固とした「表」が成立した後に「裏」が展開していった原宿や渋谷とは丁寧に区別する必要がある。

<sup>37</sup> 都市空間のポスト90年代に関しては、三浦展が「ファスト風土」と名付けて指摘するような事

態が深刻化する可能性もあれば、東浩紀と北田が指摘するように（東・北田 2007）、郊外ロードサイドだけではなく、都心部に位置する街もが次々と「ジャスコ化」する可能性も否定できない。また、本稿の課題に取りかかるきっかけをつくった吉見によっても、90年代以降、社会全域のスペクタクル化が「都市の死」と「文化の死」をもたらしかねないという警鐘が鳴らされている（吉見 2005）。しかし、本稿で浮き彫りにした「擬似居住者意識」を目にしたとき、若林が、郊外的な生のリアリズムとして、「どこでもいい場所」への積極的な志向を見出したのと同じように（若林 2007:

193-201）、積極的な意味をもたない場所＝住宅地にこそリアリティを見出していった「擬似居住者」たちは、「都市-文化の死」の宣告を出し抜きつつ、都市における生を実践していくのではないだろうか。「都市-文化の死」が横たわる場所——それが「ファスト風土」と呼びあらわされようと、あるいは「ジャスコ化」と呼びあらわされようと——を射程に収め、そこにおける人びとの実践を——80年代に依拠した視点からのみ90年代以降の都市を理解し尽くそうとするのではないのと同じように——丁寧に掬いだしていく作業が必要となるだろう。

## 文献

- 阿部潔, 2006, 「公共空間の快適——規律から管理へ」阿部潔・成美弘至編『空間管理社会——監視と自由のパラドックス』新曜社, 18-56.
- 安立清史, 1989, 「都市の変貌と住民の環境意識——原宿地域住民意識調査結果の分析」『日本社会事業大学研究紀要』35: 224-46.
- 安立清史・大澤真幸, 1990, 「都市環境——変化・認知・運動」『日本社会事業大学研究紀要』36: 125-48.
- 東浩紀・北田暁大, 2007, 『東京から考える——格差・郊外・ナショナリズム』日本放送出版協会.
- Barthes, Roland, 1971, "Sémiologie et urbanisme," *l'architecture d'aujourd'hui*. (= 1975, 篠田浩一郎訳「記号学と都市の理論」『現代思想』3(10): 106-15.)
- Baudrillard, Jean, 1970, *La Société de Consommation: Ses Mythes. Ses Structures*, Gallimard. (= 1979, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造〈普及版〉』紀伊國屋書店.)
- 原宿シャンゼリゼ会, 1983, 『原宿 1983』.
- , 1994, 『原宿 1993』.
- 陣内秀信, 1985, 『東京の空間人類学』筑摩書房.
- 神島二郎, 1961, 『近代日本の精神構造』岩波書店.
- 北田暁大, 2002, 『広告都市・東京』廣濟堂出版.
- , 2007, 「思考の遊歩（最終回）——テーマパークの二重性」『文學界』61(3): 232-4.
- 前田愛, 1982, 『都市空間のなかの文学』筑摩書房.
- 見田宗介, 1971, 『現代日本の心情と論理』筑摩書房.
- , 1979, 『現代社会の社会意識』弘文堂.
- 三浦展, 2004, 『ファスト風土化する日本——郊外化とその病理』洋泉社.
- , 2006, 「『街育』のすすめ——ファスト風土以外の環境に住むことは、われわれの基本的な権利だ」

- 三浦展編『脱ファスト風土宣言——商店街を救え!』洋泉社, 13-35.
- 中村由佳, 2006, 「ポスト 80 年代におけるファッションと都市空間——上演論的アプローチの再検討」『年報社会学論集』19: 189-200.
- 中野収, 1983, 「増殖する都市 多元的宇宙・東京」『現代思想』11(7): 135-43.
- 難波功士, 2006, 「戦後ユース・サブカルチャーズをめぐる(5) コギャルと裏原系」『関西学院大学社会学部紀要』100: 101-32.
- 隠田表参道町会, 1994, 『原宿—— HARAJUKU 1995』.
- 大澤真幸・安立清史, 1990, 「重層する都市空間」『年報社会学論集』3: 71-82.
- 庄司洋子・安立清史・村井美紀・三本松政之, 1988, 「原宿地域住民の生活と福祉——住民意識調査の分析を通して」『社会事業研究所年報』24: 241-85.
- 若林幹夫, 2005, 「余白化する都市空間——お台場、あるいは「力なさ」の勝利」吉見俊哉・若林幹夫編『東京スタディーズ』紀伊國屋書店, 6-25.
- , 2007, 『郊外の社会学——現代を生きる形』筑摩書房.
- 吉見俊哉, 1987, 『都市のドラマトゥルギー——東京・盛り場の社会史』弘文堂.
- , 1996, 『リアリティ・トランジット——情報消費社会の現在』紀伊國屋書店.
- , 2005, 「都市の死 文化の場所」植田和弘・神野直彦・西村幸夫・間宮陽介編『岩波講座 都市の再生を考える 1——都市とは何か』岩波書店, 101-28.

(いしい かずや、京都大学大学院人間・環境学研究所、k.ishii@eco.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)  
(査読者 平田知久、田多井俊喜)

## A study of a 1990s' urban space in Japan: Focusing on "Harajuku"

*ISHII, Kazuya*

The purpose of this article is to reconsider the current theory about urban space (e.g. Semiological and Dramaturgical approach) typically focusing on 1980s' "Shibuya". In Japan, since the 1980s, the theory is popular when we analyze urban space. Recently, however, the theory has been losing effect to analyze the state of urban space in Japan. Therefore, this article will focus on "Harajuku" which is located near "Shibuya" and has undergone a rapid social change, which is a typical example of modern urbanization in Japan. Concretely speaking, this article attempts to examine social research (mainly mental map) for visitors and residents of this town, and to examine a small-scale magazine which were mainly edited by university students in the 1980s.

After that, we will reach a conclusion that a sense of "inhabitation" and "modest hometown" is important for considering urban space in the 1990s. In addition to that, we will realize that continuity and discontinuity between 1980s' and 1990s' urban space.